

妖魔の辻占

泉鏡花

青空文庫

伝へ聞く……文政^{ぶんせい}初年の事である。將軍家の榮耀^{えいよう}其^{その}極^{ごく}に達して、武家の代^よは、將^{まさ}に一轉機^{まわり}を劃^{かく}せんとした時期だと言ふ。京都に於て、当時第一の名門であつた、比野^{ひの}大納言資治^{だいなごんやすはる}卿^{きやう}（仮^か）の御館^{みたち}の内に、一日偶^{あるひふ}と人妖^{じんよう}に齊^{ひと}しい奇怪なる事が起つた。

其^{その}の年、霜^{しも}月^{つき}十日は、予^{かね}て深く思^{おぼ}召^{しめ}し立つ事があつて、大納言卿^{わたくし}、私^{わたくし}ならぬ祈願^{ねがひ}のため、御館^{みたち}の密室^{こも}に籠^{こも}つて、護摩^{ごま}の法^{ほふ}を修^{しゆ}せられた、其^{その}の結願^{けちがん}の日であつた。冬^{ふゆ}の日は分けて短いが、

まだ雪洞ほんぼりの入らない、日暮方ひくれがたと云ふのに、滞りなく式が果とどつた。多日しばらくの精進しょうじん齋けつさいである。世話せわに云ふ精進しょうじん落おちで、其

のへん 辺は人情にんじやうに変わりはない。久しぶりにて御休息ごきゅうのため、お奥おくに於て、厚こうき心こころ構がまえの夕ゆう餉がれいの支度しどが出来た。

其処そこで、御簾ごれんちゆう中ちゆうが、奥おくへ御入おんいりある資治卿むかえを迎むかへのため、南みなみ

御殿ごてんの入口ぐちゆうまでお立出たちいでに成る。御前おんまえを問三間あわいげんばかりを隔へだつ

て其の御先おさき払ばらいとして、袿うちぎ、紅べにの袴はかまで、裾すそを長く曳ひいて、静しず々しず

と唯ただ一人ひとり、折おりから菊きく、朱葉もみじの長廊下ながろうかを渡わたつて来たのは藤ふじの局つぼねで

あつた。

此この局つぼねは、聞きえた美女びよで、年とし紀ちようが丁ちようど三十三さんじゅうさん、比野ひのの御簾中ごれんちゆうと

同年どうねんであつた。半月はんげつばかり、身みにいたはりがあつて、勤つとめを引ひいて

ひきこも引籠つて居たのが、此の日修しゆほう法ほどき、満願まんがんの御おん二方にかたの心こころいわい祝いわいの座いに列いするため、久しぶりくわいで髪かみ容かたちを整ととのへたのである。暈たま廊みろう下かに影かげがさして、艶えん麗れいに、然しかも軟な々なと、姿すがたは黒髪くろかみとともしなに撓しなつて見える。

背後うしろに……たとへば白菊しらぎくと称とふる御厨子みずしの裡うちから、天女てんによの抜出ぬけいでたありさまなのは、貴あてに気高きたかい御簾みすだ中ちゆうである。

作者さくしやは、委くわしく知しらないが、此これは事こと実じつださうである。他たに女め童わらわの影かげもない。比野ひの卿けいの御館みたちの裡うちに、此こゝの時とき卿けいを迎むかふるのは、唯ただ此こゝの方かたたちのみであつた。

また、修法しゆほうの間まから、脇廊わきろう下かを此方こなたへ参まゐらるゝ資治しじ卿けいの方は、佩刀はかせを持もつ扈從こしやうもなしに、唯ただ一人ひとりなのである。御家風ごかふうか質素しつそか

知らない。此の頃の恚こうした場合の、江戸の將軍家——までもない、諸だいみみようようの大奥おもてと表ようの容う体たいに比較ひかくして見るが可よい。

で、藤の局つぼねの手で、隔へだてのお襖ふすまをスツと開あける。……其そこ処こで、

卿ごと御簾ごれんちゆう中ちゆうが、一いっ所しょにお奥おくへと云いふ寸法すんぽうであつた。

傍かたわらとも云いふまい。片かたあかりして、冷つめく薄うす暗くい、其そのの襖ふすま際ぎわか

ら、氷のやうな抜刀ぬきみを提たげて、ぬつと出でた、身みの丈たけ拔群はくぐんな男おとこがある。唯ただ、間ま二三尺じやく隔へだてたばかりで、ハタと藤の局つぼねと面おもてを合あはせた。

局つぼねが、其そのの時とき、はつと袖屏風そでびようぶして、間まを遮さると斉ひとしく、御簾ごれんちゆう

中の姿すがたは、すつと背後向うしろむきに成なつた——丈たけなす黒髪くろかみが、緋ひの裳もすそに

揺ゆいだが、幽かすかに、雪ゆきよりも白しろき御横顔おんよこがの気高けたかさが、振向ふりむかれた

と思おもふと、月影つきかげに虹にじの影かげの薄うすれ行いく趣おもむきに、廊下らうげを衝つと引返ひきかえさる。

「「まづ。」

と、局が声を掛けて、腰をなよやかに、片手を膝ひざに垂れた時、早はや其の襖けはい際に氣勢やすはるした資あしおと治おごそ卿かいの躰い音かんの遠そくざかるのが、静しずかに聞きえて、もとの脇わき廊ろう下かの其そ方なたに、嚴おごな衣そ冠かん束そく帯たいの姿すがたが——其頃の御館みたちの状さまも偲しのばれる——襖ふすまの羽目はめから、黄菊きぎくの薰かおりともろとももに漏もれ透といた。

藤の局は騒さわがなかつた。

「誰たれぢや、何ものぢや。」

「うゝ。」

と呻うめくやうに言いつて、ぶるくと、ひきつるが如ごとく首くびを掉ふる。

渠かれは、四十よじゅうばかりの武ぶ士しで、黒くろの紋もん着つき、袴はかま、足袋たびはだし跣はだしで居ゐた。

鬢びん乱れ、髻もとどりはじけ、薄痘痕うすあばたの顔がんしよく色が真蒼まつさおで、両眼りようがんが血走つて赤い。酒気は帯びない。宛如さながら、狂人、乱心らんしんのものと覺えたが、いまの氣高い姿にも、慌あわて、あとへ退ひかうとしないで、ひよろりとしながら前へ出る時、垂たらたら々と血したたの滴たるばかり抜刀ぼつとうの牙さえが、脈みやくを打つてぎらりとして、腕うではだらりと垂れつつも、切きつ尖きが、じりくと上へ反そつた。

局つぼねは、猶予ためらはず、肩かたをすれ違ふばかり、ひたくと寄添よりそつて、
「其方そなた……此方こちらへ。」

ひそみもやらぬ黛まゆずみを、きよろりと視みながら、乱髮抜刀らんぱつの武士さむらいも向むかひかはつた。

其それをば少しづつ、出口でぐちへ誘いざなふやうに、局つぼねは静しずしず々と紅くれないの袴はかまを廊らう

下に引く。

勿論、兇器きようきは離さない。上の空うわそらの足が躍おどつて、ともすれば局つますの袴つますに躓つまずかうとする状さまは、燃立もえたつ躑躅つつじの花うちの裡うちに、鼬いたちが狂いたふやうである。

「関東の武家のやうに見受けますが、何どうなさつた。——此ここ処こは、まことに恐おそれ多い御場所ごばしよ。……いはれなう、其方そなたたちの来とこる処ところではないほどに、よう気を鎮しずめて、心を落着おちけて、可よいかえ。咎とがも被きせまい、罪にもせまい。妾わらわが心こころで見免みのがさうから、可よいかえ、柔順おとなしく御殿ごてんを出でや。あれを左ひだりへ突つき当あたつて、ずツと右みぎへ廻まわつてお庭にわに出でや。お裏門うらもんの錠かぎはまだ下くだりては居いぬ。可よいかえ。」

「うゝ。」

「分つたな。」

「うーむ。」

「けれども、つぼね局が立停ると、刀とともに奥の方へ突返らうとし

たから、そこ其処で、うちぎそで桂の袖を掛けて、くせ曲ものの手を取つた。それが

刀を持たぬ方の手なのである。あら荒き風に当るまい、たおやめ手弱女の上

ろう藤の此のふるまい振舞は讚歎に値する。

さて手を取つて、其のまゝなやしく、お表出入口の方へ、廊

下の正面を右に取つて、ひとまが一曲り曲つて出ると、すぎと杉戸が開いて居

て、たたみ畳の真中にひおけ火桶がある。

そこ其処には、踏んで下りる程の段はないが、一段低く成つて居た。

ために下りるのに、逆上した曲ものの手を取つた局は、かれ渠を抱く

ばかりにしたのである。抱くばかりにしたのだが、余所目には手
 負へる驚に、丹頂の鶴が搔摑まれたとも何ともたとふべき
 風情ではなかつた。

折悪く一人の宿直士、番士の影も見えぬ。警護の有余つた
 御館ではない、分けて黄昏の、それぞれに立違つたものと
 見える。欄間から、薄もみぢを照す日影が映して、大な番火桶
 には、火も消えかゝつて、灰ばかり霜を結んで侘しかつた。

局が、自分先づ座に直つて、

「とにかく、落着いて下に居や。」

曲ものは、仁王立に成つて、じろくと瞰下した。しかし足
 許はふらくして居る。

「寒いな、さ、手をかざしや。」

と、美しく艶えんなお局つぼねが、白く嫵しなやかな手で、炭すびつを取つて引寄せた。

「うゝ、うゝ。」

とばかりだが、それでも、どつかと其処そこに坐つた。

「其方そちは煙草たばこを持たぬかえ。」

すると、此の乱心あわたたものは、慌あわたたしさうに、懐中あを開け、袂たもとを探した。それでも鞞さやへは納めないで、大刀だんびらを、ズバツと畳たたみに突刺つつさしたのである。

兇器きようきが手を離るゝのを視みて、局は渠かれが煙草たばこ入いれを探す隙すきに、そと身を起して、翻然ひらりと一段、天井の雲まぎに紛まぎるゝ如く、廊下はかまに袴

の裙すそが捌さばけたと思ふと、武士さむらいは武むしや振ぶりつくやうに追おひすがた。

「ほ、ほ、ほ。」

と、局はほえは、もの優ほしく微ほ笑えんで、また先の如ごとく手を取とつて、今度は横よこ斜はす違かいに、ほの暗くらい板いた敷じきを少しば時し渡わると、※ぼつともみぢの緋ひの映うつる、脇わき廊ろう下かの端はへ出でた。

言いふまでもなく、今は疾とくに、資すけ治ち卿きやうは影かげも見みえない。
もみぢが、ちらく〜とこぼれて、チチチチと小鳥こどりが鳴なく。

「千鳥ちどり、千鳥。……」

と藤とうたく口くち誦ずみながら、半なかば渡わると、白木しらきの階きのあある処ところ。

「千鳥、千鳥、あれ〜……」

と且つ指し、且つ恍惚と聞きすます体にして、

「千鳥や、千鳥や。」

と、やゝ声を高うした。

向う前裁の小縁の端へ、千鳥と云ふ、其の腰元の、濃い紫の姿がちらりと見えると、もみぢの中をくるくると、鞠が乱れて

飛んで行く。

恰も友呼ぶ千鳥の如く、お庭へ、ぱらくくと人影が黒く散つた。其時、お局が、階下へ導いて下り状に、両手で緊と、曲もの刀持つ方の手を圧へたのである。

「うゝ、うゝむ。」

「あゝ、御番の衆、見苦しい、お目触りに、成ります。……括る

なら、其の刀を。——何事も情が卿様の思召。……乱心もの

ゆゑ穩便おんびんに、許して、見免みのがして遣つてたも。」

牛蒡ごぼうたばねに、引括ひきくくつた両刀を背中に背負しよはせた、御番の衆

は立ちかゝつて、左右から、曲者くせものの手を引張つて遠ざかつた。

吻ほっと呼吸いきして、面おもての美しさも凄すげいまで蒼白あおしろく成りつつ、階きざに、

紅くれなはの袴はかまをついた、お局つぼねの手を、振袖ふりそでで抱いて、お腰元の千鳥は、

震へながら泣いて居る。いまの危あやうさを思ふにつけ、安心の涙であ

る。

下々しもじもの口から漏れて、忽たちまち京中洛中きやうちゆうらくちゆうは是沙汰これさただが—

—乱心ものは行方が知れない。

「やあ、こほうし小法師。……」

こゝで読者に、真夜中の箱根の山を想像して頂きたい。同時に、もみぢと、霧きりと、霜しもと、あの蘆あしの湖こと、大空の星とを思ひ浮べて頂きたい。

繰返して言ふが、文政ぶんせい初年霜しも月十日の深夜なる、箱根の奥の蘆あしの湖この渚なぎさである。

霧は濃くかゝつたが、関所は然さまで遠くない。峠とうげも三島寄みしまよりの渚なぎさに、憚はばからず、ばちやくと水音みずおとを立てるものがある。さみしさも静けさも、霜に星のきらめくのが、かちくくと鳴りさうなの

であるから、不断の滝よりは、此の音が高く響く。

鷺、獺、猿の類が、魚を漁るなどとは言ふまい。……時と言ひ、

場所と言ひ、怪しからず凄じいことは、さながら狼が出て竜宮の美女たちを追廻すやうである。

が、耳も牙もない、毛坊主の円頂を、水へ逆に真俯向けに

成つて、麻の法衣のもろ膚脱いだ両手両脇へ、ざぶくと水を掛ける。——恁る霜夜に、搔乱す水は、氷の上を稲妻が走るかと疑はれる。

あはれ、殊勝な法師や、捨身の水行を修すると思へば、蘆の折伏す枯草の中に籠を一個差置いた。が、鯉を遁した畚でもなく、草を刈る代でもない。屑屋が荷ふ大形な鉄砲策に、

剩あまつぎへ竹のひろひ箸ばしをスクと立てたまゝなのであつた。

「やあ、小法師こほうし、小法師。」

もの幻の霧の中に、あけの明星の光こうみょう明が、嶮山けんざんの髓ずいに浸

透みとおつて、横にひとば一幅水が光り、縦にひとすじ一筋、紫に凝りつつ真紅まつか

に燃ゆる、もみぢに添みかかえあまひたる、三抱余り見上げるやうな杉の大た

木いぼくの、梢こすえ近い葉の中から、梟ふくろうの叫ぶやうな異様なる声が響くと、

「羽黒はぐろの小法師ではないか。——小法師。」

と言ふく、枝葉えだはにざわくと風を立てて、然しかも、音もなく蘆

の中おりたに下立つたのは、霧よりも濃い大山伏おおやまぶしの形相である。金こんご

剛杖うづえを丁ちようと脇わきばさ挟んだ、片手に、帯の結目むすびめをみしと取つて、

黒紋着くろもんつき、袴はかまの武士さむらいを俯向けうつむに引提ひきさげた。

武士は、紐ひもで引ひつからげて胸へ結んで、大小を背中に背負しよはされて居る。卑俗たとえな譬たとえだけれど、小児こどもが何とかすると町内を三遍べん廻まわらせられると言つた形で、此が大納言の御館みたちを騒がした狂人であるのは言ふまでもなからう。

「おう、」

と小法師もたの擡たげた顔の、鼻は鉤かぎ形なりに尖とがつて、色は鳶とびに齊ひとしい。
 青黒く、滑ぬらぬら々とした背膚せはだの濡ぬれ色いろに、星の影のチラ／＼と映さす状さまは、大おお鯰なますが藻もの花を刺ほり青ものしたやうである。

「これは、秋葉山あきばさんの御行者おぎようじゃ。」

と言ひながら、水しぶきを立てて、身体からだを犬ぶるひに振つた。

「御身おみは京都の返りだな。」

「然れば、虚空を通り掛りぢや。——御坊によう似たものが、不思議な振舞をするに依つて、大杉に足を踏留めて、葉越に試みに声を掛けたが、疑ひもない御坊と視て、拙道、胆を冷したぞ。はて、時ならぬ、何のための水悪戯ぢや。悪戯は仔細ないが、羽ぶしの怪我で、湖に墜ちて、溺れたのではないかと思つた。」

「はゝ。」

と事もなげに笑つて、

「いや、些と身に汚れがあつて、不精に、猫の面洗ひと遣つた。チヨイ〜とな。はゝゝゝ明朝は天気だ。まあ休め。」
 と法衣の袖を通して言ふ。……吐く呼吸の、ふか〜と灰色な

のが、人間のやうには消えないで、兩個とも、其のまゝからまつて、ぱつと飛んで、湖の面おもてに、名の知れぬ鳥が乱れ立つ。

羽黒こほうしの小法師、秋葉ぎようじやの行者、二個うたがいは疑もなく、魔界の一党、狗竇ぐひんの類属。東海、奥州、ともに名代なだいの天狗てんぐであつた。

三

「成程なるほど、成程、……御坊ごぼうの方は武士さむらいであつた。」

行者が、どたりと手から放すと、草にのめつた狂人を見て、——
—小法師が言つたのである。

「然されば、此ぢや。……浜松の本陣から引攪ひきさろうて持つて参つて、

約束通り、京極、比野大納言殿の御館へ、然も、念入りに、十二

間のお廊下へドタリと遣つた。

「お、御館では、藤の局が、我折れ、かよわい、女性によしようの御身おんみ。

剩あまつさただへ唯一人にて、すつきりとしたすゞしき取とりはから計とりはからひを遊ばした

な。」

「ほゝう。」

と云つた山伏やまぶしは、真赤な鼻つまを撮むやうに、つるりと撫なでて、

「最早知つたか。」

「洛中らくちゆうの是沙汰これさた。関東一円、奥州まで、愚僧いっさんが一山いっさんへも立た

処ちどころに響こたいた。いづれも、京方きやうがたの御為おんために大慶たいけいに存ぞんぜら

れる。此とても、お行者のお手柄だ、はて敏捷すばやい。」

「やあ、如何いかがな。すばやいは御坊ぢやが。」

「さて、其あやまりが過失。……愚僧、早合点はやがてんの先はばしりりで、思おもひ懸が

けない隙ひま入いりをした。御身おみと同然どうぜんに、愚僧等らごしはい御司配おおせの命令こうむを蒙まり、

京都と同じ日、先まづく同じ刻限こくげんに、江戸城えどじょうへも事を試しみる約束

であつたれば、千住せんじゆの大橋おほはし、上野うじのの森もりを一ひとのしに、濠端ほりばたの

松まつまで飛とんで出た。かしこの威徳衰おとろへたりと雖いえども、さすがは征夷せいゐ

大將軍だいしやうぐんの居城きよじやうだ、何処いずこの門かども、番衆ばんしゆ、見張みはり、嚴重じやうじやうにして隙間すきま

がない。……ぐるりくと窺うかがふうちに、桜田門おうだもんの番所傍そばの石垣いしがきか

ら、大おおき蛇へびが面つらを出して居るのを偶ふと見つけた。霞ヶ関かすみせきには返かへり

咲さの桜ざきが一面、陽気やうきはづれの暖ぬかさかに、冬籠ふゆごもりの長なが隠居いんきよ、炬燵こたつ

から這出はいだしたものと見える。早はや往來おうらいは人立ひとたちだ。

ところ、はるかこくうに虚空から大鳶おほとびが一羽いちわ、矢のやうに下おろいて来て、す
 処へ、遙おおへびに虚ひきつか空から大鳶おほとびが一羽いちわ、矢のやうに下おろいて来て、す
 かりと大蛇おおへびを引ひきつか抓つかんで飛しやつばうとすると、這じしよもち奴も地所持い、一
つかど廉つかどのぬしと見ひきつかえて、やゝ、其の手は食くはぬ。さか鱗うろこを立てて、
 螺旋らせんに蜿うねり、却かえつて石垣の穴へ引ひきつかかうとする、抓つかんで飛しやつばうとす
 る。揉もんだ、揉もんだ。——いや、夥おびただしい人ひと群集ぐんじつだ。——そのう
 ちに、鳶の羽はが、少しづゝ、石垣の間あいだへ入いる——聊いささかは引ひきつかいて抜
 くが、少しづゝ、段々かたつばさに、片翼かたつばさが隠かくれたと思おもふと、するりと
 呑のまれて、片翼かたつばさだけ、ばさくばさ、……煽あおつて煽あおつて、大おおもが
 きに藻搔もがいて堪こたへる。——見物けんぶつは息いきを呑のんだ。」

「うむく。」

と、山伏やまぶしも息いきを呑のむ。

「馬鹿鷄よ、くそ鳶よ、鳶、鳶、とりもなほさず鳶は愚僧だ、は
ゝゝゝ。」

と高笑ひして、

「何と、お行ぎようじや者、未熟なれども、羽黒こほうしの小法師、六尺しやくや一丈じよう
ながむしの蛇なまに恐れるのでない。こゝが術てだ。人間の氣を奪ふため、故ことら
ひきこに引込まれ、やがて忽たちまち其最後の片かた翼つばさも、城の石垣いづにつ
ツと消えると、いままで呼吸いきを詰めた、群集ぐんじゆが、阿あも応おうも一
斉きに、わツと鳴つて声を揚げた。此こゝの人声ひとごゑに驚いて、番所ばんじよの
棒そうが揃そろつて飛出とびだす、麻あさ上下がみしもが群れ騒さわぐ、大玄関おおげんかんまで騒動さわどうの波
が響ひびいた。

驚破すわ、そのまぎれに、見物の群集ぐんじゆの中から、頃合ころあいなものを

ひきぎら引攫つて、空からストーンと、怪我をせぬやうに落いた。が、丁度西の丸の太鼓櫓の下の空地だ、真昼間。」

「妙。」

と、山伏がハタと手を搏つて、

「御坊が落した、試みのものは何ぢや。」

「屑屋だ。」

「はて、屑屋とな。」

「紙屑買——即ち此だ。」

と件の大策を円袖に搔寄せ、湖の水の星あかりに口を向け

て、松虫なんぞを擦るやうに策の底を、ぐわさくと爪で搔く

と、手足を縮めて搔すくまつた、垢だらけの汚い屑屋が、ころり

と出た。が、出ると大きく成つて、ふやけたやうに伸びて、ぷるツと肩を振つて、継ぎはぎの千草ちぐさの股引ももひきを割膝わりひざで、こくめいに、枯蘆かれあしの裡なかにかしこまる。

此の人間の気が、ほとぼりに成つて通つたかよと見える。ぐたりと蛙かえるつぶを潰したやうに、手足を張つて平へたばつて居た狂気きちがい武士ざむらいが、びくりとすると、むくと起きた。が、藍あいの如き顔がん色しよくして、血走つたまゝの目を睜みはりつつ、きよとりとして居る。

四

此の時代の、事実として一般に信ぜられた記録がある。

——薩さ

摩鹿児島に、小給の武士の子で年十四に成るのが、父の使に
 書面を持つて出た。朝五つ時の事で、侍町の人通りのない坂
 道を上る時、大鷲が一羽、虚空から巖の落下るが如く落して
 来て、少年を引摺むと、忽ち雲を飛んで行く。少年は夢現
 ともわきまへぬ。が、とに角大空を行くのだから、落つれば一
 堪りもなく、粉微塵に成ると覺悟して、風を切る黒き帆のや
 うな翼の下に成るがまゝに身をすくめた。はじめは双六の絵を
 敷いた如く、城が見え、町が見え、ぼうと霞んで村里も見えた。
 やがて渾沌暝々として風の鳴るのを聞くと、果しも知らぬ渺
 々たる海の上を翔けるのである。いまは、運命に任せて目を
 瞑ると、偶と風も身も動かなく成つた。我に返ると、鷲は大なる

樹きの梢こずえに翼を休めて居る。が、山の峰いただきの頂たかに、さながら尖塔せんとうの立たてる如ごとき、雲つらぬを貫つらぬいた巨木きよぼくである。片手を密そつと動かすと自由ゆに動いた。

時に、脇指わきゆびの柄えに手を掛かけはしたものの、驚おどろのためを支さへられて梢こずえに留とまつた身体からだである。——殺ころしおほせるまでも、渠かれを疵きずつけて地に落おされたら、立たち処どころに五体が碎くだけよう。が、此このまゝにしていも生命いのちはあるまい。何どう処置しよしようと猶ためら予よふうちに、一打ひとち煽あおつて又飛とんだ。飛びつつ、いつか地にやゝ近く、ものの一二間けんを掠かすめると見た時、此この沈ちんゆう勇ゆうなる少年は、脇指わきゆびを引ひ抜きぬきざまにうしろ突つきにザクリと突つく。弱とる処ところを、呼い吸きもつかせず、三み刀かたなよかたな四よ刀かたなさし通としたので、弱よ果わりてて驚あおむが仰あおむ向けに大地に伏ふす、伏

しつつ仰向けにひるがえ翻る腹に乗つて、柔い羽根蒲団に包まれたやうに、
ふはふはと落ちた。

あたか恰も驚の腹からうまれたやうに、少年は血を浴びて出たが、四

方、山また山ばかり、さんがくちようじよう山嶽重疊として更に東西を弁じない。

とぼくとたど辿るうち、人間の木樵きこりに逢つた。木樵は絵の如く斧おの

を提げて居る。進んで礼して、城下を教へてと言つて、且かつ道みちあ

んない案内を頼むと、城下とは何んぢやと言つた。お城を知らないか、

と言ふと、知んねえよ、とけろりとして居る。薄給でも其の頃の

官員のせがれ忤だから、向う見ずに腹を立てて、鹿兒島だい、と大きく

言ふと、鹿兒島とは、何処どこぢやと言ふ。おのれ、日本にっぽんの薩摩さつまの

国くに鹿兒島を知らぬかと呼ばはると、伸びくとした鼻の下を漸やっ

と縮めたのは、おおき大な口を開けてあ呆れたので。薩摩は此処ここから何千里あるだ、とあべこべ反対に尋ねたのである。少年も少し心こころ着いて、此処ここは何処どこだらう、と聞いた時、はじめて知つた。木曾の山やま中なかであつたのである。

ここ此処で、二人で、始めて鷲の死体を見た。

ふもと麓へ連つれ下つた木樵が、やがて庄屋しやうやに通じ、陣屋に知らせ、

こおり郡の医師を呼ぶ騒ぎ。精神にも身体からだにも、見事異状がない。――

鹿児島まで、及ぶべきやうもないから、江戸の薩摩屋敷まで送り届けた。

朝五いっつ時どき、宙に釣つられて、少年が木曾山さんちゆう中で鷲の爪を離れたのは同じ日の夕ゆうべ。七つ時、間あいだは五時十時間である。里数ほぼは略四百

里であると言ふ。

——驚でさへ、まして天狗の業である。また武士が刀を抜いて居たわけも、此の辺で大抵想像が着くであらう。——

ものには必ず対がある、序に言はう。——是と前後して近江の膳所の城下でも驚が武士の子を攫つた——此は馬に乗つて馬場に居たのを鞍から引搦んで上つたのであるが、此の時は湖水の上を颯と伸した。刀は抜けて湖に沈んで、小刀ばかり帯に残つたが、下が陸に成つた時、砂浜の渚に少年を落して、驚は目の上の絶壁の大巖に翼を休めた。しばらくして、どつと下いて、少年に飛かゝつて、顔の皮をりくらはんとする処を、一生懸命脇差でめくら突きにして助かつた。人に介抱されて、後に、所

を聞くと、此の方は近かつた。近江の湖岸で、里程は二十里。――江戸と箱根は是これより少し遠い。……

それから、人間が空をつられて行く状さまに参考になるのがある。

……此は見たものの名が分つて居る。讚州高松、松平侯の世

子で、貞五郎と云ふのが、近習たちと、浜町矢の倉の

邸やしきの庭で、凧たこを揚げて遊んで居た。

些ちと寒いほどの西風で、凧に向つた遙か品川の海の方から、ひ

らくくと紅あかいものが、ぽつちりと見えて、空中を次第に近づく。

唯、真逆まっさかきになつた女で、髪がふはりと下に流れて、無慙むぜんや真

白な足を空に、顔は裳もすそで包まれた。ヒイと泣な叫なきぶ声こゑが悲しげに

響いて、あれくと見るうちに、遠く筑波つくばの方へ霞かすんで了しまつた。

近習たちも皆見た。丁ど日中で、然も空は晴れて居た。——膚も衣もうつくしく蓑虫がぶらりと雲から下つたやうな女ばかりで、他に何も見えなかつた。が、天狗が掴んだものに相違ない、と云ふのである。

けれども、こゝなる両個の魔は、武士も屑屋も逆に釣つたのではないらしい。

五

「ふむ、……其処で肝要な、江戸城の趣は如何であつたな。」
 「いや以ての外の騒動だ。外濠から竜が湧いても、天守へ雷が

転がつても、太鼓櫓たいこやぐらの下へ屑屋くせやが溢こぼれたほどではあるまいと思ふ。又、此の屑屋くせやが興きようがつた男で、鉄砲てつぱう箆ざるを担かついだまゝ、落ちた処ところを俯向うつむいて、篋へら鷲さぎのやうに、竹はしの箸しで其処そこ等らを突つつきながら、胡乱うろうろ々々する。……此こを高たか櫓やぐらから蟻ありが葛籠つづらを背負しよつたやうに、小さく真下まっしたに覗のぞいた、係けいりの役人やくにんの吃驚びつくりさよ。陽ひの面おもての蝕むしばんだやうに目めが眩くらんで、折やからであつた、八やつの太鼓たいこを、ドーン、ドーン。」

と小法師こほうしなるに力ちからある声こゑが、湖水こすいに響こく。ドーンと、もの凄すごく訝こたまして、

「ドーン、ドーンと十三打じゅうさんつた。」

「妙みよう。」と、又乗出のりだした山伏やまぶしが、

「前代未聞。」ことばと言の尾を沈めて、半ば歎息して云つた。

「謀叛人むほんにんが降つて湧いて、二の丸にまるへ取詰めたやうな騒動だ。将

軍の住居すまいは大奥まで湧上わきあがつた。長袴ながばかまは迂る、上下かみしもは蹴けつま

躓ずく、茶坊主ちやぼうずは転ぶ、女中は泣く。追取刀おつとりがたな、槍やり、薙刀なぎなた。

そのうち騎馬のりだで乗出した。何と、紙屑買かみくずかい一人を、鉄砲てつぱうづくめ、

槍襖やりぶすまで捕とらへたが、見ものであつたよ。——国持諸侯くにもちだいましようしらみが虱

と合戦かつせんをするやうだ。」

「真か、それは？」まこと

「云ふにや及ぶ。」

「あゝ幕府の運命は、それであらかた知れた。——」

「む、大納言殿御館おやかたでは、大刀だんびらを抜いた武士さむらいを、手弱女たおやめの手

一つにて、黒髪ひとすじ一筋乱さずに、もみぢの廊下を毛虫の如く撮つまみ出す。」

「征夷大將軍の江戸城に於ては、紙屑買唯一人を、老中はじめ合戦の混乱ぢや。」

「京都の御ため。」

と西に向つて、草を払つて、秋葉の行者ぎようじやと、羽黒の小法師こほうし揃つて、手を支ついて敬伏けいふくした。

「小虫しょうちゆう、微貝びばいの臣等しんら……」

「欣幸きんこう、慶福けいふく。」

「謹んで、万歳まんざいを祝しゆくたてまつ奉る。」

六

「さて、……町奉行まちぶぎようが白洲しらすを立てて驚いた。召捕めしとつた屑屋を送るには、槍、鉄砲で列をなしたが、奉行役宅やくたくで突放つっぱなすと蠹ひきがえるほどの働きもない男だ。横から視みても、縦から視ても、汚きたない屑屋に相違あるまい。奉行は継上つぎがみしも上下、御用箱、うしろに太刀持たちもち、用よう人ん、与力よりき、同心徒どうしんであい、事も嚴重に堂々と並んで、威儀を正して、ずらりと蠟燭ろうそくに灯ひを入れた。

灯を入れて、更あらためて、町奉行が、余あまりの事に、櫓やぐらした下うろを胡乱うろついた時と、同じやうな状さまをして見せろ、とな、それも吟味ぎんみの手段とあつて、屑屋を立たせて、箆ざるを背負しよはせて、煮にしめたやうな手て

拭ぬぐいまで被かぶらせた。が、猶なほの事だ。今更ながら、一同の呆あきれた処ところを、廂ひさしを跨またいで倒さかしまのぞぞいて狙ねらつた愚僧だ。つむじ風を哄どつと吹かせ、白洲しらすの砂利じやりをからくと搔かきまわ廻わいて、パツと一斉に灯を消した。逢魔おうまケ時の暗どきまくらぎれに、ひよいと掴つかんで、空くうへ抜けた。お互こに此こ処こ等は手軽い。」

「いや、しかし、御苦勞ぢや。其処そこで何か、すぐに羽黒へ歸らいで、屑屋を掴ごぼうんだまゝ、御坊ごぼう関所ちか近く参まられたは、其の男ごなんに後難ごなんあらせまい遠慮かな。」

「何、何、愚僧が三度息を吹掛ふきかけ、あの身体からだ中だまじなうた。屑く買ずが明あ日すが日、奉行の鼻毛あを抜あかうとも、嚏くさめをするばかりで、一向いっこうに目は附つけん。其処そこに聊いも懸念きせんはない。が、正直な氣のいゝ

屑屋だ。不便ふびんや、定めし驚いたらう。……労力ほねおりやすめに、京見物をさせて、大仏前の餅もちなりと振舞ふるまはうと思つて、足ついでに飛んで来た。が、いや、先刻の、それよ。……城の石垣に於て、大蛇おへびと捏合こねおうた、あの臭氣においが脊筋せすじから脇まへ纏まとうて、飛ぶほどに、駈かけるほどに、段々たま堪らぬ。よつて、此の大おお盥いだらいで、一寸行ちよつとぎ水みづをばちやく遣やつた。

愚僧ものずきは好事こうじ——お行者こそ御苦勞な。江戸まで、あの荷物にものを送おくり見えます。——武士さむらいは何とした、心しんが萎なえて、手足てあしが突張つっぱり、殊ことの外ほか疲れたやうに見受けるな。」

「おゝ、其の武士さむらいは、部役ぶやくのほかほかに、仔細しじゆあつて、些ちと灸きゆうを用もちゐたのぢや。」

「道理こそ、……此は暑からう。待てく、お行ぎようじや者。灸と言へば、煙草たばこが一吹ひとふかし吹したい。丁どちよう、あの岨道そばみちに螢ほたるほどのものが見える。獵師が出たな。火繩ひなわらしい。借りるぞよ。来い。」

とハタと掌てのひらを一つ打つと、遙はるかに隔へだつた真暗まつくらな渚なぎさから、キリノくくくと舞ひながら、森も潜くぐつて、水の面おもを舞つて来るのを、小法師ほうしは指の先へ宙で受けた。つはぶきの葉を喇叭らっぱに卷いたは、即すなわち煙管きせるで。蘆あしの穂むしといはず、草むしと言はず、り取つて、青磁色せいじいろの長い爪つまに、火を翳かざして、ぶくくと吸すいつけた。火繩を取つて、うしろ状ざまの、肩越かたごしに、ポン、と投げると、杉の枝に挟まつて、ふつと消えたと思つたのが、めらくくと赤く燃もえ上あがつた。ぱちくと鳴ると、双子山ふたごやま風颯おろしとして、松明たいまつばかりに燃えたのが、

見るくうちちに、轟ごうと響いて、凡およそ片輪車かたわぐるまの大きさに火の掬からんだのが、梢こずえに掛かつて、ぐるくぐるくと廻る。

此の火てらに照された、二個の魔神の状さまを見よ。けたましい人ひと声えかすか幽かに、鉄砲を肩に、獵師が二人のめりつ、反そりつ、尾花おばなの波なみに漂なうて森の中を遁にげて行く。

山やまうさぎ兔うさぎが二三疋びき、あとを追ふやうに、躍おどつて駈かけた。

「小法師、あひかはらず悪いたずら戯ずぢや。」

と兎かぶとのやうな額ひたい皺しわの下おそろに、恐おそろしい目を光らしながら、山やまぶ

伏しは赤い鼻をひこくと笑つたが、

「拙道せつどう、煙草たばこは不調法ふちようほうぢや。然さらば相しょう伴ばんに腰兵糧こしびようろうは使はうよ。」

と胡坐あぐらかいた片脛かたすねを、づかりと投出なげだすと、両手で逆に取つて、上へ反せそら、膝ひざぶしからボキリボキリ、ミシリとやる。

「うゝ、うゝ。」

「あつ。」

と、武士さむらいと屑屋は、思はず声を立てたのである。

見向きもしないで、山伏は挫折へしおつた其の己おのが片脛を驚掴わしづかみに、片手で踵きびすが穿はいた板草鞋いたわらじを、り棄すてると、横銜よこぐわへに、ばりノ
 くと齧かじる……

鮮血なまちの、唇を滴たらたら々と伝みふを視て、武士さむらいと屑屋は一のめりに突伏つっつぶした。

不思議な事には、へし折つた山伏の片脛のあとには、又おなじ

やうな脛が生えるのであつた。

杉なる火の車は影を滅けした。寂せき寞ぼくとして一層もの凄すごい。

「骨も筋もないわ、肝きもたましい魂たましいも消えて居る。不ふ便びんや、武さむら士らい……

詫わびをして取らさうか。」

と小法師が、やゝもの静しずか

「お行者よ。灸きゆうとは何かな。」

七

此の間まに――

「塩しお辛からい。」

と言ふ山伏やまぶしの聲がして、がぶく。

「塩辛い。」

と言つて、湖水の水を、がぶくと飲んだ――

「お行ぎようじや者。」

「其の武士さむらいは、小堀伝十郎こほりでんじゆうろうと申す――陪臣ばいしんなれど、それ

とても千石せんごくを食むはのぢや。主人とのの殿どのは松平大島守まつだいらおおしまのかみと言ふ

……」

「西国さいこく方の諸侯だいまようだな。」

「されば御譜代ごふだい。將軍家ながぬなもとに、流も源も深い若年寄わかどしよりぢや。……何

と御坊ごぼう。……今度、其の若年寄べんぎに、京都比野大納言

殿より、（江戸隅田川みやこどりの都鳥みやこどりが見たい、一羽首尾いちうすゐようして送

られよ。」と云ふお頼みがあつたと思へ。——御坊の羽黒、拙せつど
 道の秋葉に於いても、旦那だんなたちがこの度たびの一儀いちぎを思ひ立たれて、
 拙道ちつかい等使らに立つたも此のためぢや。申さずとも、御坊は承知と存
 ずるが。」

「はあ、然そうか、いや知らぬ、愚僧はやばし早走はやがってんり、早合点はやがってんの癖で、用
 だけ聞いて、して来いな、とお先いっこばしりに飛出とびでたばかりで、一
 向うに仔細さいじゆは知らぬ。が、扱さては、根とこぎす処ところがあるのであつたか。」

「もとよりぢや。——大島おおしまのかみ守まもり、此の段、殿中とのちゆうに於いて披露
 に及ぶと、老ろうじゆう中ちゆうはじめ額ひたいを合せて、

此は今めかしく申すに及ばぬ。業平朝臣なりひらあそんの（名にしおはゞい
 ぎこととはむ）歌の心をまのあたり、鳥の姿に見たいと言ふ、花

につけ、月につけ、をりからの菊紅葉きくもみじにつけての思おもひ寄よりには相違
 あるまい。……大納言心こころでは、將軍家は、其の風流の優しさに感
 じて、都鳥をば一ひとつがい番、そつと取り、紅くれないむらさき、紫むらさきの房かざりを飾つた、金
 銀蔀まきえ絵かごの籠すに据つかゑ、使つかも狩かり衣ぎぬに烏帽えぼし子しして、都みやこにのぼす事と思
 はれよう。ぢやが、海苔のり一帖じよう、煎餅せんべいの袋ふくろにも、贈物おくりものは心す
 べきぢや。すぐまに其そのは対あ手てに向むかふ、当方あたの心こころ持もちの表しるしに相成ある。
 ……將軍家むしんへ無心むしんとあれば、都鳥一羽ひとも、城一いちつも同じ道理どうりぢや。
 よき折かみから京方かみがたに對し、關東かんとうの武威ぶいをあらはすため、都鳥みやこどりを射いて、
 鴻こうの羽はね、鷹たかの羽はねの矢やを胸むなさきに裏搔うらいて貫つらぬいたまゝを、故わざと、蜜み
 柑箱かんぼこと思おもふが如何いかが、即すなはち其そのの昔むかし、権現ごんげん様さま戦場せんじやうお持もち出しの矢疵やきず
 弾丸たま痕あとの残のこつた鎧よろい櫃びつに納いめて、槍やりを立てて使者しやを送おくらう。と

言ふ評定ぢや。」

「氣障な奴だ。」

「むゝ、先づ聞けよ。——評定は評定なれど、此を發議したのは今時の博士、秦四書頭と言ふ親仁ぢや。」

「あの、親仁。……予て大島守に取入ると聞いた。成程、

其辺の催しだな。積つても知れる。老耄儒者めが、家に引込

んで、溝端へ、桐の苗でも植ゑ、孫娘の嫁入道具の算段なりと

して居れば済むものを——いや、何時の世にも当代におもねるも

のは、当代の学者だな。」

「塩辛い……」

と山伏は、又したゝか水を飲んで、

「其^そ処^こでぢや……松平大島守、邸^{やしき}は山ぢやが、別荘^{ほんじよおおか}が本所大
 川^わべりにあるに依^より、かた／＼大島守か都鳥^いを射^いて取る事に
 成^なつた。……此^この殿^{いさま}、聊^{いささ}かももの道理^{わきま}を弁^わへてゐながら、心得違
 ひな事は、諸事万端、おありがたや関東の御威光^{ごみようだい}がりでな。――
 一^{ひと}年^{とせ}、比野大納言、まだお年若^{としわか}で、京都御名代^{ごみやうだい}として、日
 光^{ひかり}の社^{しゃ}参^{さん}に下^{くだ}られたを饗^{きやう}応^{おう}して、帰洛^{きらく}を品川へ送^{おく}るのに、
 資^{やす}治^{はる}卿^{きやう}の装^{しよう}束^{とく}が、藤色^{ふじいろ}なる水干^{すいかん}の裾^{すそ}を曳^ひき、群^{むらちどり}衛^ゑ
 を白^{そめい}く染^{うきもん}出^でだせる浮^{うきもん}紋^{もん}で、風折^{かざおり}烏帽子^{えぼし}に紫^{むらさき}の懸^{かけ}緒^おを着^きけたに負
 け^じない氣^きで、此^{この}大島守^{おほしまのり}は、紺^{こん}染^{ぞめ}の鎧^{よろい}直^{ひた}垂^{たれ}の下^{した}に、白^{しろ}き菊^{きく}
 綴^じなして、上^{うへ}には紫^{むらさき}の陣羽織^{じんうゐ}。胸^{むね}をこはせ掛^{かけ}にて、後^{うしろ}へ折^{おり}開^{ひら}
 いた衣^{えもん}紋^{もん}着^{つき}ぢや。小袖^{こそで}と言^いふのは、此^これこそ見^みよがしで、嘗^{かつ}て

將軍家より拝領の、黄なる地の綾あやに、雲形くもがたを萌葱もえぎで織出おりだし、白しろ糸いとを以もつて葵あおいの紋着もんつき。」

「うふ。」

と小法師こほうしが噴笑ふきだした。

「何なにと御坊ごぼう。——資治卿じちけいが胴袖どうそでらに三さん尺じやくもしめぬものを、大島守おほしまもりの装なりで、馬うまに騎のりつて、資治卿じちけいの駕籠かごと、演戲わざおぎがかりで向むかい合あつて、どんなものだ、とニタリとした事ことがある。」

「気障きざな奴やつだ。」

「大島守おほしまもりは、おのれ若年寄わかしよの顯達けんたつと、將軍家しやうぐんけの威光いこう、此見これみよがしの上に、——予かねて、資治卿じちけいが美男びなんにおはす、従したがつて、此の卿けい一生いせいのうちに、一千人いせんにんの女をんなを楽たのむ念願ねんがんあり、また婦人ふじんの方かたより恁かくと

知りつつ争つて媚を捧げ、色を呈する。専ら当代の在ざい五中將ごちゆうじやうと言ふ風説ふうわさがある——いや大島守、また相当の色男がりぢやによつて、一つは其嫉ねたみぢや……負けまい気ぢや。

されば、名にしおはゞの歌につけて、都鳥の所望しよもうにも、一つは曲ねつたものと思つて可よい。

また此の、品川で、陣羽織菊綴きくとじで、風折烏帽子紫かざおりえぼむらさきの懸緒かけおに張は合りあつた次第を聞いて、——例の天下の博士はかせめが、（遊ばされたり、老生ろうせいも一度其その御扮装を拝見。）などと申す。

処ところで、今度、隅田川りようがん両岸りょうがんの人ひと払はらい、いや人よせをして、件くだんの陣羽織、菊綴、葵紋あおいもん服ふくの扮装いでたちで、拝見ものの博士を伴へぎりゆうひ、弓矢を日置流へぎりゆうに手たばさんで静しずしず々と練出ねりだした。飛びも、立

ちもすれば射取いとられう。こゝに可笑おかしな事は、折から上汐あげしお満々たる……」蘆あしの湖は波しやう一条、銀河ぎんがを流す氣勢けはいがした。

「かの隅田川すみだがはに、唯一ただ羽なる都鳥みやづがあつて、雪なす翼よくは、朱鷺とぎいろ色の影かげを水脚みづあしに引ひいて、すら〜と大島守おほしまもりの輝きらいて立つ袖そでの影かげに入るいるばかり、水岸みづぎしへ寄よつて来た。」

「はて、それはな？」

「誰も知るまい。——大島守おほしまもりの邸やしきに、今年二十になる（白妙しろたえ）と言いつて、白拍子しらびやうしの舞まいの手てだれの腰元こしもとが一人あるわ——一年ひととせ

……資治卿しじけいを饗応うたいげの時、酒宴しゆえんの興きように、此こゝの女むすめが一ひとさし舞まつた。——ぢやが、新曲しんきよくとあつて、其そのの今いま様ようは、大島守おほしまもりの作つくる処ところぢや。」

「迷惑めいわく々々。」

「中に（時鳥ほととぎす）何とかな言ふ一句がある。——白妙が（時鳥）とうたひながら、扇をかざして膝ひざをついた。時しも屋やの棟むねに、時鳥が一せいついしたのぢや。大島守の得意、察するに余あまりある。……ところが、時鳥は勝手に飛んだので、……こゝを聞け、御坊ごぼうよ。

白妙は、資治卿の姿に、恍惚うっとりと成つたのぢや。

大島守は、折に触れ、資治卿の噂うわさをして、……その千人の女ちぎと契ちぎると言ふ好色をしたゝかに詈ののしると、……二人三人の妾めかけ、……故わざとか知らぬ、横よこ肥ぶとりに肥つた乳母うぼまで、此れを聞いて爪つまはじき、身みぶるひをする中うちに、白妙唯一ただ一人、（でも。）とか申して、内ない々ない思しひをほのめかす、大島守は勝手が違ふ上に、おのれ容きり色いろ自慢うだけに、いまだ無理口説むりくどきをせずおに居る。

其の白妙が、めされて都のほに上ると言ふ、都鳥の白粉おしろいの胸に、
 ふつくりと心こころ魂たましいを籠こめて、肩も身も翼に入れて憧あこが憬がれる：
 ；其の都鳥ぢや。何と、遁にげる処どころではあるまい。——しかし、人
 間には此は解らぬ。」

「むゝ、聞えた。」

「都鳥は手とらまへぢや。蔵くらんど人の鷺さぎならねども、手どらまへた

都鳥を見て、將軍の御威光、殿おんとくの恩徳とまでは仔細ない、——

別荘で取つて歸つて、羽はぶしを結ゆわへて、桜の枝につるし上げた。

何と、雪せつぱく白裸身の美女を、梢こずえに的まとにした面影おもかげであらうな。松

平大島守源みなもとの何某なにがし、矢の根ひょうにしるして、例の菊綴きくとじ、葵あおいの紋もんぷ

服く、きりくと絞ひょうつて、兵ひょうと射いたが、射た、が。射たが、薩張さつぱり

当らぬ。

尤も、此の無慙な所業を、白妙は泣いて留めたが、聴かれさうな筈はない。

拜見の博士の手前——二の矢まで射損じて、殿、怫然とした処を、（やあ、飛鳥、走獸こそ遊ばされい。忤る死的、殿には弓矢の御恥辱。）と呼ばはつて、ばらくと、散る返咲の桜とともに、都鳥の胸をも射抜いたるは……

……塩辛い。」

と山伏は又湖水を飲む音。舌打しながら、

「ソレ、其処に控へた小堀伝十郎、即ち彼ぢや。……拙道が引拵んだと申して、決して不忠不義の武士ではない。まづ言は

ば大島守には忠臣ぢや。

さて、^{ところ}処で、矢を貫いた都鳥を持つて、大島守登營に及び、将

軍家一覽の上にて、^{によほう}如法、^{よろいびつ}鎧櫃に納めた。

^{わざ}故と、^{さした}使者差立てるまでもない。ぢやが、大納言の卿に、將軍

家よりの^{ごしんもつ}御進物。よつて、九州へ帰国の諸侯が、^{みちすがら}途次の使

者兼帯、其の^{さむらい}武士が、都鳥の^{さいりよう}宰領として、^{まかりい}罷出でて、東

海道を上つて行く。……

秋葉の^{だんな}旦那、つむじが曲つた。^{はやて}颯風の如く、^{ごぼう}御坊の羽黒と氣脈

を通じて、また、^まく間の今度の^{もよおし}催。拙道は即ち^{おおせ}仰をうけて、都

鳥の使者が浜松の本陣へ着いた^{ところ}処を、風呂にも入れず、縁側から

^{ひつさら}引攫つた。——^{さむらい}武士の這奴の^{しやつ}帯の^{ゆいめ}結目を^{つか}掴んで^{ひきつ}引釣ると、^{ひと}齊

しく、こんごうづえ 金剛杖もちそに持添へたよろいびつ 鎧櫃はは、とても事に、たぬき 狸が出て、
かんおけ 棺桶を下げると言ふ、ふるえんじゆ 古槐の天辺へ掛け置いて、おおい 大井、天
 竜、びわこ 琵琶湖も、せた 瀬多も、京の空へひとつび 一飛ぢや。」

と又がぶりと水を飲んだ。

「時に、……時にお行ぎようじや者。矢を貫つらぬいた都鳥は何とした。」

「それぢや。……桜の枝かかに掛つて、射貫いぬかれたとともに、しろたえ 白妙は
 胸を痛めて、どつと……息も絶たえだえ々とこの床とこに着いた。」

なむさんぼう 「南無三宝。」

「あはれと思し、おほ 峰、山、たけ 嶽の、姫たち、貴夫人たち、届かぬま
 でもとて、もつかごかいほう 目下御介抱遊ばさるる。」

ちんちよう 「珍重。」

と小法師こほうしが言つた。

「いや、安心あいなは相成あいならぬ。が、かた／＼の御心ごしんもじ、御如才おじよさい

はないかに存ずる。やがて、此の湖上にも白い姿が映るであらう。

——水も、夜よも、さて更ふけた。——武士さむらい。」

と呼んで、居直いなおつて、

「都鳥さしおもし蘇よみがえ生うらず、白妙しらたかなきものと成らば、大島守おほしまのりを其のまゝ

に差置さしおかぬぞ、と確しかと申せ。いや／＼待て、必ず誓ちかつて人には洩もら

すな。——拙道せつだうの手に働はたらかせたれば、最早もはや汝そちは差許さしゆるす。小堀こぼり

伝十郎でんじうらう、確しかとせい、伝十郎。」

「はつ。」

と武士さむらいは、魂たまとともに手を支ついた。こゝに魂と云ふは、両刀りうたう

の事ではない。

八

「何と御坊」

と、少時しばらくして山伏やまぶしが云つた。

「思がひ懸がけず、恚かかる処ところで行逢ゆきおうた、互たがの便宜べんぎぢや。双方、彼等かれらを取替とりかへて、御坊ごぼうは羽黒へ歸りついでに、其そのの武士さむらいを釣つつて行く、拙道せつどうは一ひとつばさ翼つばさ、京へ伸のして、其そのの屑屋くずやを連れ参つて、大仏前だぶつぜんの餅もちを食くはさうよ——御坊の厚意は無にせまい。」

「よい、よい、名案。」

「参れ。……屑屋。」

と山の巖ひだを霧の包むやうに枯蘆かれあしにぬつと立つ、此の大なる魔神ましんの裾すそに、小さくなつて、屑屋は頭から領伏ひれふして手を合せて拜んだ。

「お慈悲じひ、お慈悲でござります、お助け下さいまし。」

「これ、身は損そこなはぬ。ほね休めに、京見物をさして遣やるのぢや。」

「女房、女房がござります。児こがござります。——何として、箱根から京まで宙が飛べませう。江戸へ帰りたう存じます。……お武家様、助けて下せえ……」

と膝ひざ行いざり寄る。半なかば夢心地の屑屋は、前後の事を知らぬのであ

るから、武士を視て、其の劍術に縫つても助かりたいと思つたのである。

小法師が笑ひながら、塵を払つて立つた。

「可厭なものは連れては参らぬ。いや、お行者御覧の通りだ。御苦勞には及ぶまい。——屑屋、法衣の袖を取れ、確と取れ、江戸へ帰すぞ。」

「え、滅相な、お慈悲、慈悲でござります。山を越えて参ります。歩いて帰ります。」

「歩けるかな。」

「這ひます、這ひます、這ひまして帰ります。地を這ひまして帰ります。其の方が、どれほどお情か分りませぬ。」

「はゝ、気まゝにするが可い、——然らば入交つて、……武士、武士、愚僧に縋れ。」

「恐れながら、恐れながら拙者とても、片時も早く、もとの人間に成りまして、人間らしく、相成りたう存じます。峠を越えて戻ります。」

「心のまゝぢや。——御坊。」

と山伏が式代した。

「お行者。」

「少時、少時何うぞ。」

と蹲りながら、手を挙げて、

「唯今、思ひつきました。此には海内第一のお関所がござり

ます。拙者券てがたを持ちませぬ。夜あけを待ちましても同じ儀ゆゑに

……ハタと当惑つかまつを仕ります。」「

武士さむらいはきつぱり正気に返つた。

「仔細さいしない。久能山くのうざん辺あたりに於ては、森の中から、時々、（興おきつ

津鯛だいたいが食べたい、燈籠とうろうの油がこぼれるぞよ。）なぞと声の聞

える事を、此こゝ辺あたりでもまぎくと信じて居る。——関所せきじょに立たちむ

向むかつて、大音だいにんに（権現ごんげんが通る。）と呼ばはれ、速すみやかに門を開ひら

く。」「

「恐れ……恐おそれ多おほい事——承うけたまわりまするも恐多おほい。陪臣ばいしんの分ぶんを

仕つかまつつて、御先祖様お名をかたります如き、血反吐ちへどを吐はいて即死を

します。」「

と、わななくと震へて云つた。

「臆病もの。……可し。」

「計らひ取らせう。」

同音に、

「関所！」

と呼ぶと、向うから歩行くやうに、するくと真夜中の箱根の

関所が、霧を被いて出て来た。

山伏の首が、高く、鎖した門を、上から俯向いて見込む時、

小法師の姿は、ひよいと飛んで、棟木に蹲んだ。

「権現ぢや。」

「罷通るぞ！」

どつ
哄と笑つた。

小法師の姿は東あずまの空へ、星の中に法衣ころもの袖そでを搔か込んで、うつむいて、すつと立つ、早走はやばしりと云つたのが、身動きもしないやうに、次第々々に高く上る。山伏の形は、腹はら這はふ状さまに、金剛杖こんごうづえを權かにして、横に霧こを漕こぐ如く、西へふはく、くるりと廻つて、ふはくくと漂ひひ去る。……

唯と、仰いで見るうちに、数十人の番士ばんし、足あし軽がるの左右に平伏ひれふす関の中を、二人何の苦もなく、うかうかと通り抜けた。

「お武家様、もし、お武家様。」

ハツとしたやうに、此の時、刀の柄つかに手を掛けて、ものくしく見返つた。が、汚きたい屑屋なに可厭いやな顔して、

「何だ。」

「お袂たもとすがに縋すがりませいで、一足ひとあしも歩ある行あるかれませぬ。」

「ちよつ。参れ。」

「お武家様、お武家様。」

「黙もくつて参れよ。」

小湧谷こわくだに、大地獄おおじごくの音を暗あんちゆう中に聞きいた。

目の前の路みちに、霧が横よこに広ひろいのではない。するりと無紋むもんの幕まくらが垂たれて、ゆるく絞しぼつた総ふさむらさきの紫むらさきは、地ちを透すく内側うちがはの燈ともしびの影かげに、色も見えつつ、ほのかに人声ひとごえが漏もれて聞きえた。

女の声である。

時に、紙屑屋かみくしの方が、武士さむらいよりは、もの馴なれた。

そして、ひざまず跪かせて、屑屋も地つちに、並んでうやうや恭しく手を支ついた。

「江戸へ帰りますものにござります。山道に迷ひました。お通しを願ひたう存じます。」

ひっそりして、しばらく少時すると、

「お通り。」

と、もの柔やわらかな、優しい声。

さつ颯と幕が消えた。消ゆるにつれて、もうろう朦朧として、しろこそで白小袖、

くれなゐがま紅の袴、またあやにしき綾錦、ふりそで振袖の、貴女たち四五人の姿とともに、

中に一人、雪にまが紛ふ、うつくしき裸体の女があつたと思ふと、都

鳥がめのう一羽、瑪瑙の如きおおいわ大巖にたた湛へた温泉いでゆに白く浮いて居た。が、

それも湯気とともにあお蒼く消えた。

星ばかり、峰ばかり、颯々たる松の嵐の声ばかり。

幽かすかに、互たがいの顔の見えた時、真空まそらなる、山かづら、山の端はに、朗ほがら

な女の声して、

「矢は返すよ。」

風を切つて、目さきへ落ちる、此が刺さると生命いのちはなかつた。

それでも武士さむらいは腰を抜いた。

引立ひきたてても、目ばかり働いて歩あ行き得ない。

屑屋が妙なことをはじめた。

「お武家様、此の筈はずへお入んなせい。」

入いれると、まだ天狗てんぐのいきの、ほとぼりが消えなかつたと見え

て、鉄砲てっぽう筈へ、腰からすつぽりと納おさまつたのである。

屑屋が腰を切つて、肩を振つて、其の杖を背負つて立つた。

「屑くずい。」

うつかりと、……

「屑くずい。」

落ちた矢を見ると、ひよいと、竹の箒はしではさんで拾つて、癖くせに成つて居るから、杖ぼうへ抛る。

鴻こうの羽はねの矢やを額ひたいに取つて、蒼あおい顔して、頂あたまきながら、武ぶ士しは震へて居た。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成」 泉鏡花」 国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」 岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「新小説」

1922（大正11）年1月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妖魔の辻占

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>